

巻頭言

トルコのアナトリア 開発プロジェクト (GAP)を訪ねて

第3回世界水フォーラム事務局長

尾田 栄章

世界水会議の第10回理事会がイスタンブールで開かれた折りに、トルコ南西部のアナトリア開発プロジェクト(GAP)を案内頂く機会に恵まれた。

アナトリア開発プロジェクトの目玉は何といてもアタチュルクダムである。

総貯水容量487億立方メートルを日本のダムと較べると、現在日本にある3000を越えるダムの貯水池容量を全部合わせたよりもはるかに大きい。ダムサイトを訪れ、ダム湖の大きさにまさに海を見るような気分になった。

このダム地点の年間流入量が266億立方メートルであることを考えると、ほぼ2年分の流れを黙ってそのままこのダム湖に溜め込めることが出来ることになる。日本のダムでは、ダム地点の年間流入量の10分の1もない貯水容量のダムが多く、その運用に四苦八苦しているのが現状である。これでは同じダムという文字を使ってもその意味するところは全く違ったものといわざるを得ない。

こうなると当然ダムそのものも巨大なものとなる。ダム自体の堤体積が8450万立方メートルもあり、ダム本体が日本の大きなダム貯水池に相当するほどである。またこのダムが生み出す年間発電量は90億KWHにも及んでおり、文字通りアナトリア開発の原動力になるものと期待されている。

しかし現地で最も力を入れて案内されたのは、このアタチュルクダムだけではなかった。

ダム同様に力を入れて案内し、説明してくれたのは、現地に設けられた多目的コミュニティー・センターの活動であり、新たに灌漑農業に取り組む農民との対話であった。

多目的コミュニティー・センターは小さな町の粗末な家が密集している地域にある。この辺りの普通の集合住居をそのまま使っており、一見したところ周りの家と見分けがつかない。

このセンターの活動目的はGAP開発を地域に根付かせることにある。まさに草の根的な活動であり、センターの運営自体も地域の若い女性達の自主性に任されている。

センター長もうら若い20歳になるかならないかの小柄な女性で、伝統的なスカーフを頭に巻

いて初々しく活動内容を説明してくれた。センターには10数台のミシンを備え付けた部屋が2つあり、そのミシンを使って様々な手芸品が作られ、販売されていた。手に職を付けるための職業訓練施設としての機能ももっているらしい。

最近国際会議という「ジェンダー」が大きな話題になる。男性に伍して女性がいかに社会参加していくかを巡って熱烈な議論が展開される。しかしここでの活動はそのようなものではなく、もっと現実的なもののように見受けた。この地では、いまだに女性は一人では医者にも行ってはならないという状態に置かれている。そんな中での取り組みなだけに、若い女性達の活動には精一杯の健気さが満ち溢れていた。

ダムに貯め込まれた水は広大な農地を豊かに潤すことになる。

今まで天水に頼って細々と農業を営んでいた農民にとって、灌漑農業は初めての経験である。水をどのように使えば良いのかわからず、使いすぎから地下水位が上昇してしまったこともある。そんな試行錯誤が今も続いているようだ。この地の農民の代表5、6名との対話が、蟻塚のような土製の家を復元した記念館の中庭でもたれた。灌漑農業として何を栽培するか、から始まって灌漑用水をいかにして分配するか等々の次々に出てくる新しい問題に戸惑いつつも立ち向かっている農民の真剣な姿が対話の中から浮かんできた。

このようなGAPの活動は、ユーフラテス川を堰き止めて生み出された水が源となっている。ということは下流のシリア、イラクと水を巡って利害対立が生じるということでもある。

トルコ側の説明では、ユーフラテスの流れを悪化させるような使い方はしていないという。下流で必要となる流量を確保した上で、余剰部分だけをダムに貯めているとのことである。しかし下流の国々との間で、すなわち流域全体として水の使い方についての協議が整ったというわけではない。またクルド問題を抱える地だけに、クルド人との境界を明確にするために無理やりダムを造ったのだという中傷話も耳にした。

しかしそんな人間の思惑も、遙か地平線まで荒涼と広がる大自然を前にすると余りに小さなものに思えてくる。こんな景色の中で、草の根的な小さな人間の活動を大切にしつつ、茫々と広がる大地に立ち向かっているトルコ政府の意気込みに頭が下がった。

それだけに、ユーフラテス川の流域全体を対象とする総合河川管理が出来ないものか、という思いが、ないものねだりに近いと知りつつより一層強まってくる。

まるで世界の水問題を考える上での一つの方向をはっきりと指し示しているかのよう。